

リテラシーと異文化間能力：異文化理解に対する外国人留学生の  
意識調査をもとに

Literacy and Intercultural Communicative Competence: Based on an Attitude Survey of  
International Students toward Intercultural Understanding

永岡悦子, 流通経済大学  
Etsuko Nagaoka, Ryutsu Keizai University

## 1. はじめに

日本学生支援機構の「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」によれば、平成 30 年の学部留学生数 84,857 人のうち、83.0%にあたる 70,448 人は私立大学に在籍しており、学部留学生の受け入れにおいて私立大学が大きな役割を果たしていることがわかる。しかし、その全てが十分な日本語能力を身につけているわけではなく、異文化理解や適応能力も未熟なまま大学に入学するため、大学生活やコミュニケーションに問題を抱えている。留学生活には異文化間能力が必要不可欠であるが、学習者の持つ文化的背景や母語のほか、外国語能力などのリテラシーによって発揮できる能力が異なることが予想される。本研究では、日本の首都圏近郊に立地する中規模私立大学に在籍する外国人留学生を対象に異文化理解に対する意識調査を実施し、日本語能力を中心としたリテラシーと異文化間能力との関係について分析する。

### 1.1 先行研究

現在、OECD や EU のキーコンピテンシー、アメリカを中心とした 21 世紀スキルなど、21 世紀で育成すべき汎用的能力について研究が進められている。中でもグローバル化時代を生き抜くためには、異文化間能力が必要不可欠な要素だと考えられている。言語を通じて異なる文化をもつ人々との交流の促進を目的とする外国語教育においても、異文化間能力は重要な課題となっている。ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の執筆にも携わったバイラム (2015 : 155) は、国際化社会において、言語的知識や技能だけではなく、他者や我々をより豊かに理解し共存するために役立つ「異文化間能力 (intercultural competence) を育成できるような指導法や学習法を開発すべきであると述べている<sup>(注 1)</sup>。しかし、限られた時間や環境の中で、外国語の知識や異文化間能力に関する項目を学習者が等しく修得することは難しい。また、同じ教育環境にあっても、学習者によって学習背景が異なるため、学習者の視点から学習項目を再構築する必要がある。

### 1.2 研究目的

本研究では、学習者の特性に応じてどのような能力を優先的に学習するべきか、日本で日本語を用いながら高等教育機関で学ぶ外国人留学生に実施した、異文化理解に対する意識調査の結果から、グローバル社会での異文化間能力を再考することを目的とする。

## 2. 調査方法

調査は、2018年1月、7月、2019年1月、7月の計4回にわたって、質問紙を用い、以下6つの質問を日本語による自由記述で回答する形式で実施した。

表1 質問項目

問1	日本に留学してよかったと思うことはなんですか。その理由はなんですか。
問2	日本での生活が、将来のあなたの人生にどのように役立つと思いますか。その理由はなんですか。
問3	これまでの日本生活で、失敗したり困ったり不安に思ったりしたことはありますか。それはなぜでしたか。
問4	上の3に書いた問題をどのように解決しましたか。
問5	日本での生活をより充実させるために、今のあなたにもっとも必要な能力は何だと思いますか。
問6	上の5に書いた能力を高めるために、あなたは今現在どんな努力をしていますか。または、すべきだと思いますか。

### 2.1 調査対象

対象者は、日本の首都圏近郊に立地する中規模私立大学、X大学に在籍する学部留学生86名である。対象としたのは、「リベラルアーツ入門」という必修の一般教養科目の受講生で、全員2年生に在籍していた。留学生の国籍は中国が59名、ベトナムが20名、マレーシアが2名、スリランカ・ネパール・バングラディッシュ・韓国が各1名であった。日本語能力は日本語能力試験のN1合格者が13名、N2合格者が44名、N3・N5・未受験の者が29名となっており、N2レベルの留学生が中心となっていた。滞日期間は、1年～3年未満が46名、3年～5年未満が37名、5年以上が3名であった。対象とした留学生の内訳は下記の通りである。

表2 調査対象者

日本語能力	N1 13, N2 44, N3・N5・未受験 29
国籍	中国 59 台湾 1 ベトナム 20 マレーシア 2 スリランカ・ネパール・バングラディッシュ・韓国 各1
滞日年数	1～3年未満 46, 3年～5年未満 37, 5年以上 3

### 2.2 分析方法

留学生は日本でのアルバイトや大学の授業も体験し、日常生活や大学生活において日本語を用いて過ごすことができているが、日本人とのコミュニケーションや学業面で問題を抱えていることもある。このような環境の中で、本稿では日本語能力別にどのような問題があるかを把握するために、対象者を日本語能力試験のレベルに応じて、N1グループ、N2グループ、N3ほかグループの3つに分け、分析を行った。

分析では、計量テキスト分析のためのフリーソフトウェア、樋口（2014）が開発した KH Coder を使用し、「テキストマイニング」という手法を利用して、学生の自由記述の回答の分析を行った。アンケートで得られた自由記述における頻出語の抽出と、抽出された語と語の共起ネットワーク分析を実施することで、外国人留学生が日々の異文化コミュニケーションの中で、何を意識し、何に問題を抱えているか、問題意識を分析することにした。

データは、学生の手書きによるアンケート結果の内容を、フェイスシートの情報と共に Microsoft 社の Excel に入力した。学生の回答内容は書かれた内容の意図を最大限に尊重しつつ、誤字脱字や文法的な誤りがあった場合には適宜修正を行った。また、文末に句点のないものには句点を追加し、1 文の区切りを明確にした。また、回答は 1 文を 1 行にまとめて表示するようにした。続いて、回答内容の部分を、テキストエディタである Microsoft 社のメモ帳にコピーし、KH Coder で読み込めるようにした。KH Coder は、Version2 を使用した。

### 3. 結果・考察

#### 3.1 日本留学に対する意義

日本留学に対して留学生がどのような意義を感じているかを調査するために、「問 1 日本に留学してよかったと思うことは何ですか。その理由は何ですか。」、「問 2 日本での生活が、将来のあなたの人生にどのように役立つと思いますか。その理由はなんですか。」という 2 つの質問を用意した。

問 1 に対する回答から頻出語を抽出すると、日本語能力のレベル別に下記のようになった。「」は抽出語、（ ）は出現回数、順位は出現回数の多い順に、上位 10 位までを示す。

表 3 問 1 頻出語リスト

N1	1 位「日本」 (16) 2 位「思う」「生活」 (5) 4 位「自分」「文化」 (4) 6 位「人」「大学」「勉強」「来る」「留学」 (3)
N2	1 位「日本」 (52) 2 位「文化」 (24) 3 位「思う」 (18) 4 位「自分」「生活」 (17) 6 位「留学」 (15) 7 位「勉強」 (14) 8 位「理解」 (9) 9 位「いろいろ」「友達」 (8)
N3 ほか	1 位「日本」 (22) 2 位「文化」 (16) 3 位「自分」 (10) 4 位「日本語」 (8) 5 位「いろいろ」「好き」 (7) 7 位「日本人」「勉強」 (6) 9 位「思う」「理解」 (5)

3 つのグループともに、「日本」「生活」「文化」「勉強」「留学」という語が上位になっている。留学生の回答例は、「留学は自分自身にとって、各方面の能力の試練である。日本では勉強するだけでなく、自分で生活し、各種の技能を身につけることも、自分にとって3年以来進歩があります。(N1)」、「日本の文化を理解したことです。日本のイメージを見直す。日本のいいところは勉強で

きます。(N2)」「小さい時いつも日本のアニメを見ました。ずっと日本が好きです。高校の時、日本語を学びました。だから日本に来ました。(N3)」のように、日本語や技能の習得に対する意欲や、日本文化への好意的な態度がみられる点に共通性がある。

「問 2 日本での生活が、将来のあなたの人生にどのように役立つと思いますか。その理由はなんですか。」に対する回答から頻出語を抽出すると、下記のようになった。

表 4 問 2 頻出語リスト

N1	1位「思う」(10) 2位「日本」(9) 3位「生活」「役立つ」(7) 4位「日本人」(6) 5位「自分」「将来」(5) 8位「経験」(4) 9位「時間」「日本語」
N2	1位「日本」(28) 2位「思う」(27) 3位「生活」(22) 4位「自分」「将来」(16) 6位「役立つ」(12) 7位「人」(10) 8位「人生」「日本人」(8) 10位「解決」「経験」(6)
N3ほか	1位「日本」(27) 2位「生活」(15) 3位「思う」「将来」(13) 4位「自分」(9) 5位「就職」(9) 6位「いろいろ」「頑張る」「人生」(5) 9位「仕事」「来る」「理由」(4)

N1、N2 グループの回答例には、「日本に留学して、一人で生活するので、さびしくて、初めてバイトを始めて、色々つらいことなどがあったり、いつも一人なので、自分でのりこえないと落ち込んでしまうので忍耐力がどんどん強くなってくる。そして、日本に生活して、日本人のやり方や、日本人の常識などを見習ったりして、どんどん成長している。(N1、ベトナム)」、「将来のキャリアに有益に役立つと考える。理由は日本で就職という抱負を持ち、X大学の経験と知識とあいまって、力を生かしたいと思う。(N2、ベトナム)」などがあり、「忍耐力」や「成長」、「力を生かす」など、抽象度が高い語彙が使用されている。それに対して、N3 グループは、日本語の語彙力の差も要因の一つと考えられるが、より実践的な内容の記述が見られる。回答例に、「日本に来る前に、自分で料理を作ったことと野菜と生活用品を買ったことがないです。日本に来て、何でも自分で解決するから、はじめてやることがいっぱいありました。いろいろなことを勉強しました。人生に役立つと思います。(N3ほか、中国)」というものがあるが、買い物为例に母国と日本の日常生活の違いが具体的に述べられている。記述の方法に日本語能力の差は認められるものの、留學生活の困難を乗り越え人間的に成長できた点や、日本で就職するための知識や日本文化への理解を習得できた点に留學生活の意義を見出している点に、3つのグループの共通性がある。

さらに、回答の記述の中で、ある語彙がどの語彙と共に用いられていたのかという共起関係を可視化するために、共起ネットワークを作成、学生の意識の分析を試みた。共起ネットワークとは、ある単語が同じ文中でどの語彙と共に使用されているか、出現パターンの似通った語を線で結んだ図によって表現したもので



### 3.2 日本留学の問題点と解決方法

留学生活の問題点をさぐるため、「問 3 これまでの日本生活で、失敗したり困ったり不安に思ったりしたことはありますか。それはなぜでしたか。」と質問した。

3つのグループともに、「日本」「日本語」が1位、2位を占めており、日本語能力が留学生活の問題点の大きな要因となっていることがわかる。N2、N3ほかグループでは、「アルバイト」「仕事」という語彙も上位となっている。

具体的な事例をみると、「日本に来たばかりの時、日本語も下手で、どこに行ってもうまくならなかった。あの時本当に留学をやめて帰国したかったですが、よかったのはほぼ困難を乗り越えた。私にとって、一番大事な思い出です。

(N1、中国)」という回答例のように、日本語習得は困難であるが、それを乗り越えたことに大きな意義を感じていることがわかる。また、日本語のほか、「これまでの日本生活で、失敗したり困ったり不安に思ったりしたことがある。不安だったことはビザ更新の問題です。労働時間が厳しくなっているので、日本生活が大変になると思います。日本生活で失敗したことは、バイトで日本語が分からなくて、何回も目上の人におこられた。(N2、ベトナム)」のように、ビザの更新のような法律的な手続きや、「日本へ来てから困ったことはいろいろあります。日本語がわからなくて仕事ができなくなったり、時間を守らなくて仕事に遅刻したりしたことがあります。(N3、ネパール)」のように、時間的な概念の相違といった文化的な背景の違いも、留学生活における困難な点と捉えていることがわかる。

表 5 問 3 頻出語リスト

N1	1位「日本」(8) (10) 2位「思う」「失敗」「日本語」(5) 5位「日本人」「来る」(4) 7位「外国」「困る」「最初」「不安」(3)
N2	1位「日本」(28) 2位「日本語」(21) 3位「困る」「生活」(17) 5位「不安」(15) 6位「思う」(8) 7位「自分」「失敗」(7) 9位「最初」(6) 10位「アルバイト」「人」「問題」「来る」(5)
N3ほか	1位「日本語」(12) 2位「日本」(11) 3位「生活」「来る」(6) 5位「不安」(5) 6位「アルバイト」(6) 7位「下手」「困る」「仕事」「通じる」「問題」(3)

問 3 の問題点の解決方法を調べるため、「問 4 上の 3 に書いた問題をどのよう  
に解決しましたか。」という質問を設定し、表 6 に結果をまとめた。

3つのグループともに、最も頻度の多い語彙は「日本語」であり、日本語学習  
で問題解決を図ろうとしていたことがわかる。相違点は人物を示す語彙で、N1  
グループには「日本人」、N2 グループには「自分」「日本人」「友達」、N3 ほ  
かグループには「自分」「先生」「友達」という語彙が使用されていた。N1、  
N2 グループの留学生は、「一生懸命日本語を勉強しました。毎朝 6 時のニュー  
スを必ず見えています。そして、日本人の友達を作って、日本語がしゃべれるよ  
うに頑張りました。日本語の試験にも参加して、書く、読む、聞く、話す、全面的  
に努力しました。その後、苦もなくバイトを始めた。(N1、中国)」の例のよ

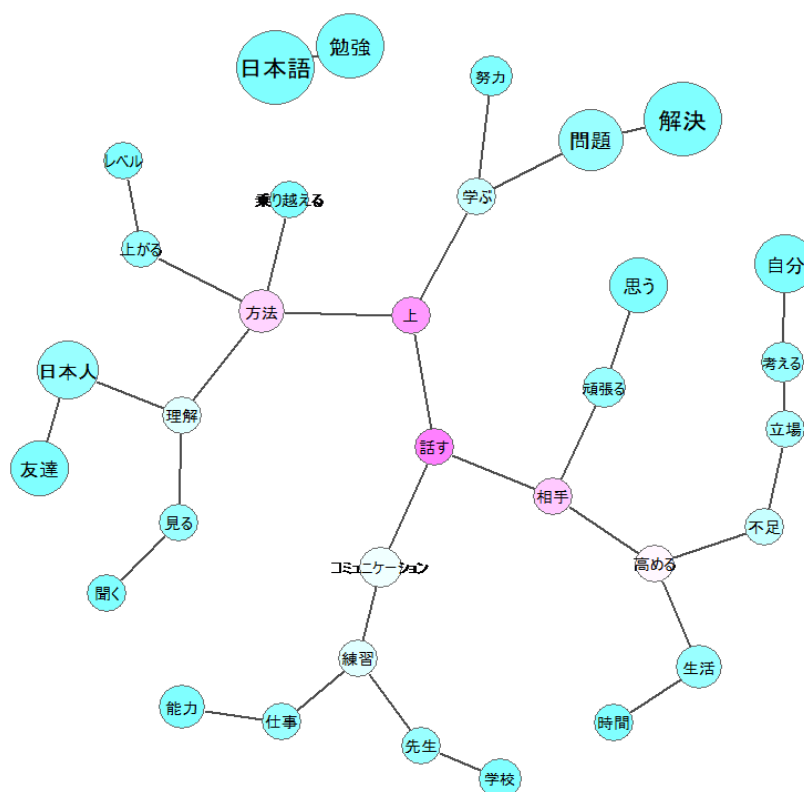
うに、ニュースを見たり、日本人の友達を作ったりするなど、意識的に様々な学習ストラテジーを使用している様子がわかる。N3 ほかグループの回答例では、「自分の弱いところを探して、なんで自分のレベルが弱いか、それについて弱点をどんどん直します。(N3 その他、中国)」、「先生と学校が助けてくれました。(N3 その他、中国)」のように、自分自身で努力を重ねたり、友達や先生の助けを借りていたりしていた様子が見える。

表 6 問 4 頻出語リスト

N1	1位「日本語」(8) 2位「解決」(5) 3位「勉強」(4) 4位「頑張る」(3) 5位「一生懸命」 5位「日本人」「来る」(4) 7位「外国」「困る」「最初」「不安」(3)
N2	1位「解決」「日本語」(14) 3位「勉強」(21) 4位「問題」(10) 5位「自分」「日本人」(9) 7位「思う」「友達」(8) 9位「日本」 (6) 10位「今」(6)
N3 ほか	1位「日本語」(9) 2位「勉強」(8) 3位「解決」(6) 4位「自分」「先生」(5) 6位「日本」(3) 7位「時間」「手伝える」「問題」「友達」(3)

問 4 の共起ネットワークの例として、N2 グループの結果を示す。「日本語」「勉強」が大きな円で示されているが、N2 グループでは左上の「方法」や「話す」という語彙から、ネットワークが広がっていることが特徴的である。

図 2 問 4 N2 グループの共起ネットワーク



### 3.3 日本留学のために必要な能力

最後に、留学生生活を通じて、留学生自身がどのような能力を必要としているかを調べるため、「問5 日本での生活をより充実させるために、今のあなたにもっとも必要な能力は何だと思いますか。」という質問を設定し、その回答をまとめると、下記のようになった。

表7 問5 頻出語リスト

N1	1位「日本語」「能力」(10) 3位「勉強」(6) 4位「英語」(5) 5位「コミュニケーション」「大学」「知識」(4) 8位「社交」「生活」「日本」「必要」「文化」(3)
N2	1位「能力」(38) 2位「日本語」(29) 3位「思う」(20) 4位「必要」(7) 5位「生活」(7) 6位「コミュニケーション」「自分」「社交」「日本」(6) 10位「一番」「解決」「交流」「勉強」「問題」(5)
N3ほか	1位「日本語」(24) 2位「能力」(21) 3位「思う」「必要」(6) 4位「コミュニケーション」(4) 5位「社会」(3) 6位「一番」「自分」「就職」「上手」「積極」「態度」「独立」「勉強」「話せる」(2)

3つのグループともに「日本語」が抽出語リストの上位を占めているが、N1グループは「英語」「大学」「知識」などから、外国語や専門性の習得に対して強い意欲がみられる。N2グループとN3ほかグループは、「コミュニケーション」「社交」「社会」など、社会やコミュニケーションに対する意欲がみられる。N1グループの回答では、「まず多くの単位を取得する。大学でまなんだ知識を後の仕事で運用することができる。貿易と物流の方面の知識を学ぶ。日中の貿易往来について、その方面の知識を勉強している。また、英語をもっと勉強しなければならない。(N1、中国)」という例があり、大学での勉強に対する心構えが良くできている様子がわかる。N2グループでは、「日本語で交流して、文章を書く方面の能力は、もっと向上することが必要だと思う。充実させる留学生活のために、日常の社交性も必要だと思う。また、積極的な態度と問題解決能力も必要である。(N2、中国)」のように、交流を重視している様子がわかる。N3ほかグループでも、「私にとって必要な能力は外国人だったら日本語能力で、日本語でコミュニケーションが取れないと就職できない。(N3ほか、ベトナム)」のように、就職のためにコミュニケーション能力を重視する意見もみられた。

N1グループ、N2グループの共起ネットワークを作成すると、下記のようになった。N1グループでは「日本語」を中心としながら、「英語」や「大学」「知識」などの語彙に広がっていくのに対し、N2グループでは「コミュニケーション」「問題」「解決」「生活」「充実」といった社会参加に関する語彙が中心となっている特徴が見られた。



図3 問5 N1グループの共起ネットワーク

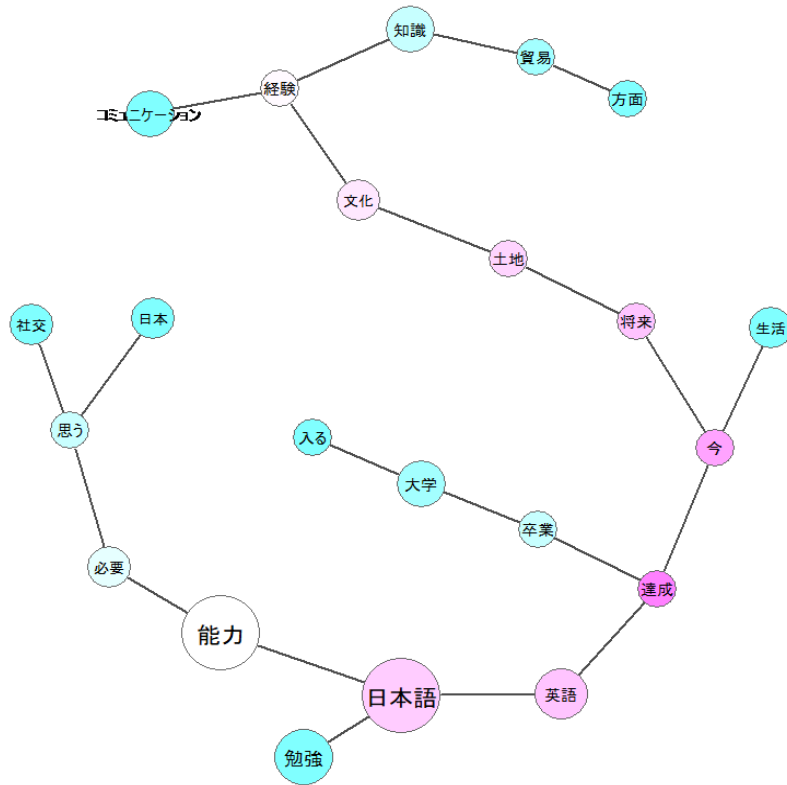
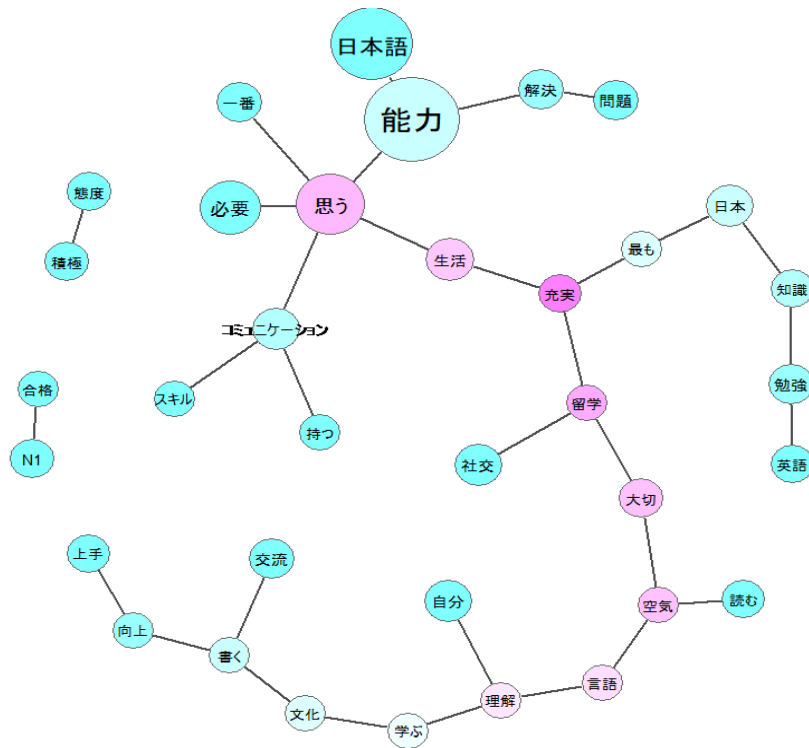


図4 問5 N2共起ネットワーク



#### 4. 結論と今後の課題

本稿では、留学生の視点から異文化間能力を見直すことを目的に、留学生 86 名を対象に質問紙調査を実施し、その回答を日本語能力のレベル別に分析し、異文化間能力と日本語能力との関係を検討した。その結果、留学生の異文化間能力において日本語能力が非常に重要な要素になっていることを改めて確認した。

留学生を N1 グループ、N2 グループ、N3 ほかグループの 3 つに分けて分析したが、全体的に留学生は日本留学への意義を感じており、日本語や技能の習得に対する意欲や、日本文化への好意的な態度がみられた。また、留学生生活の困難を乗り越え人間的に成長できた点や、日本で就職するために留学生生活は役立つと考えていた。一方、問題点としては、日本語能力が原因で学業のほか、アルバイトや人間関係でトラブルが生じたり、異文化適応も難しくなることもわかった。

グループ別の相違点としては、問題解決方法に違いが見られた。N1、N2 グループの留学生は、意識的に日本人との人間関係を築いたり、学習ストラテジーを活用したりすることで、問題解決や日本語学習に取り組んでいる様子が見られた。一方、N3 ほかのグループでは、学校や先生、先輩など自分より知識がある人に助けをもらうことで、問題を解決しようとしていた。さらに、留学生が求めている能力においても、N1 グループでは「日本語」を中心としながら、「英語」や「大学」「知識」などの語彙に広がっていくのに対し、N2、N3 ほかのグループでは「コミュニケーション」「問題」「解決」「生活」「充実」といった社会参加に関する語彙が中心となっていた。N1 グループはより専門的な知識を、N2、N3 ほかのグループはよりコミュニケーションを求めていることがわかる。今回の結果から、異文化間能力を育成にあたって日本語能力の違いに応じた学習配慮が必要となることをふまえ、今後は学習者の母語によるインタビューなど、質的な調査も積み重ねることで、研究を深めていきたいと考えている。

注1：バイラムの *intercultural* の訳語としては、「相互文化的」（バイラム 2015）という翻訳もあるが、本稿では「異文化間教育」という学問領域と議論する際の関係性を考慮する上で、「異文化間能力」という用語を用いる。

#### 参考文献

- 国立教育政策研究所（2016）『資質・能力 理論編』東洋館出版社  
 日本学生支援機構（2019）「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2018/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html)（2019年8月31日）  
 バイラム、マイケル（2015）細川英雄（監修）山田悦子（翻訳）古村由美子（翻訳）『相互文化的能力を育む外国語教育: グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店  
 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版

付記：本研究は、JSPS 科研費「外国人留学生が行為主体者として求めるグローバル・シティズンシップの検証」（19K00713）の助成を受けたものである。